

複素多様体のアフィン埋込の超越指数

第10回アフィン代数幾何学研究集会

2012年9月6日(木) 関西学院大学 大阪梅田キャンパス

第20回沼津研究会

2013年3月6日(水) 沼津工業高等専門学校

泉 脩藏

〒577-8502 東大阪市小若江 近畿大学理工学部

量子コンピュータ研究センター

複素多様体のアファイン埋込の超越指数

1. 多変数 Wronskians
2. 正則函数芽のベクトル空間と初項空間の双対性
3. 初項空間の一般の点における D 閉性
4. 束点に付随したアルチン環

正則函数芽の有限次元ベクトル空間に次数アルチン環を対応させる。

5. 埋め込まれた多様体の Bos-Calvi の高階接空間
6. 埋め込まれた多様体上でのテイラー展開

\mathbb{R}^m の曲線上のほとんどの点でテイラー展開がうまく定義できる。

7. 解析集合芽の超越性
8. 一般の点における零評価

\mathbb{R}^m に埋め込まれた多様体の超越性はほとんどの点で高くはない。

1. 多変数 Wronskians

DEF. $Y := (\nu_1, \dots, \nu_m) \in (\mathbb{N}_0^n)^m$ ($\mathbb{N}_0 = \{0, 1, 2, 3, \dots\}$) が次の条件を満たすときヤング・ライクと言う

$$(\nu \in \mathbb{N}_0^n, \exists \nu_i \in Y : \nu \leq \nu_i) \implies \nu \in Y.$$

ここで \leq は、 \mathbb{N}_0 の普通の順序の直積順序である。

例： $Y := \left\{ \begin{array}{cc} (2, 0), & (1, 1), \\ & (1, 0), \\ & & (0, 0) \end{array} \right\}$ はヤング・ライクではない。(0,1) を加えればヤング・ライクとなる： ($m = 4, n = 2$)

m 個の元から成るヤング・ライクな多重指数 $\subset \mathbb{N}_0^n$ の集合全体を \mathcal{Y}_m で表す。

1.1 LEM. $\nu \in Y \in \mathcal{Y}_m \implies \nu \subset \{0, 1, \dots, m-1\}^n$

多変数 Wronskians の定理を述べる：

1.2 THM. [Walker 2005] $\Omega \subset \mathbb{C}^n$: 連結開集合
 $\{f_1, \dots, f_m\}$: Ω 上の有理型関数とするとき、

(1) 次の条件は同値：

- f_1, \dots, f_m は 1 次独立
- $(\nu_1, \dots, \nu_m) \in \mathcal{Y}_m$ が存在して

$$W(f_1, \dots, f_m; \nu_1, \dots, \nu_m) := \begin{vmatrix} f_1^{(\nu_1)} & f_1^{(\nu_2)} & \cdots & f_1^{(\nu_m)} \\ f_2^{(\nu_1)} & f_2^{(\nu_2)} & \cdots & f_2^{(\nu_m)} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ f_m^{(\nu_1)} & f_m^{(\nu_2)} & \cdots & f_m^{(\nu_m)} \end{vmatrix}$$

は恒等的に零ではない。

(2) \mathcal{Y}_m は一般の $\{f_1, \dots, f_m\}$ に対して、(1) が成り立つ最小の集合である。

すると正則函数の有限次元のベクトル空間は有限個の偏微分方程式の解空間として表される：

1.3 Cor. [to Walker's theorem]

開集合 U 上の正則函数から成る有限次ベクトル空間 $Z \subset \mathcal{O}_{n,b}(\Omega)$ の基底 $\{f_1, \dots, f_m\}$ をとる。

すると Z は次の偏微分方程式系の正則解の空間となっている。

$$W(f_1, \dots, f_m, y; \nu_1, \dots, \nu_{m+1}) = 0 \quad ((\nu_1, \dots, \nu_{m+1}) \in \mathcal{Y}_{m+1})$$

ここで $y = y(t) \in \mathcal{O}_n(\Omega)$ が未知函数である。

2. 正則函数芽のベクトル空間と初項空間の双対性

正則解析的局所環の有限次元部分ベクトル空間の双対空間を構成する。

DEF. t : b を中心にしたアファイン座標

$f_b \downarrow = f \downarrow$: $f \in \mathbb{C}\{t\}$ の初項

テイラー展開の零ではない最低次の斉次項

$f_b \downarrow$ の変数は f の変数に対応するギリシャ文字で書く。 $\tau_i := t_i \downarrow$ など。

$Z \subset \mathcal{O}_{m,b}$ を有限次元部分ベクトル空間とするとき

$Z_b \downarrow := \text{Span} \{f \downarrow : f \in Z\} \subset \mathbb{C}[\tau]$: b における初項空間

$$\left(\text{内在的記法} \quad Z_b \downarrow := \text{Gr}(Z) = \bigoplus_{i \in \mathbb{N}_0} \frac{Z \cap \mathfrak{m}_b^i}{Z \cap \mathfrak{m}_b^{i+1}} \subset \mathbb{C}[\tau] \right)$$

$\downarrow: Z \longrightarrow Z_b \downarrow, \quad f \longmapsto f_b \downarrow$: 初項作用素 (これは線形ではない。)

(1.5)-線形型式 SESQUILINEAR FORM:

$$S_{n,b} : \mathbb{C}[\tau] \times \mathcal{O}_{n,b} \longrightarrow \mathbb{C}$$

$$S_{n,b} \langle \sum \alpha_\nu \tau^\nu \mid \sum \beta_\mu (t-b)^\mu \rangle = \sum \nu! \alpha_\nu \bar{\beta}_\nu,$$

$$S_{n,b} \langle \tau_1^{\nu_1} \cdots \tau_n^{\nu_n} \mid f \rangle = \frac{\partial^{\nu_1} \cdots \partial^{\nu_n} \bar{f}}{\partial t_1^{\nu_1} \cdots \partial t_n^{\nu_n}}(a) :$$

($\tau_1^{\nu_1} \cdots \tau_n^{\nu_n}$ は、 \mathbb{C}^n の高階接ベクトル、
 いわば「 b での Dirac delta」の符号付き高階微分)

- $S_{n,b}$: **非退化** i.e. $\mathbb{C}[\tau]^\perp = \{0\}$, $\mathcal{O}_{n,b}^\perp = \{0\}$
 よって、弱位相に関して $\mathbb{C}[\tau]$ は $\mathcal{O}_{n,b}$ の双対 TVS 空間をなす :

2.1 THM. [de Boor-Ron 1990, 1992]

$Z_b \subset \mathcal{O}_{m,b}$: 有限次元部分ベクトル空間

\implies 制限 $S_Z : (Z_b \downarrow \times Z_b) \longrightarrow \mathbb{C}$ も非退化

3. 初項空間の一般の点における D 閉性

$\Omega \subset \mathbb{C}^n$: 連結開集合、 $f_1, \dots, f_m \in \mathcal{O}_m(\Omega)$ を考える。

$$\mathcal{Y}_m^k := \mathcal{Y}_m \cap \{\nu : |\nu| \leq k\}^n \quad (|\nu| = |(k_1, \dots, k_m)| := \sum k_i)$$

$$r_k(t) := \max\{\text{rank}W(f_1(t), \dots, f_m(t); \nu_1, \dots, \nu_m) : (\nu_1, \dots, \nu_m) \in \mathcal{Y}_m^k\}$$

と置く。

t の函数としては、 $r_k(t)$ は Ω の空ではない解析的開部分集合 U_k 上で最大値をとる。この最大値を r_k とする。

もし f_1, \dots, f_m が一次独立ならば、Walker の定理により $k \geq m - 1$ のとき、 $r_k = m$ となる。

3.1 PROP. Ω の空ではない解析的開集合 $U_1 \cap \dots \cap U_{m-1}$ 上で、 $\text{Span}(f_1, \dots, f_m)$ の Z のどの次数のジェットもベクトル束 $J^k Z$ をなす。

- $Z^{\text{bdle}} := \{b \in \Omega : \forall k \text{ に対して } J^k Z \text{ は } b \text{ の近傍でベクトル束}\}$
 $= U_1 \cap \dots \cap U_{m-1}$ (上述、ユークリッド位相で稠密・開)
 この集合の点を**束点**という。

D -invariant: ベクトル空間 $V \subset \mathbb{C}[\tau]$ が

τ_i ($i = 1, \dots, m$) による偏微分で不変であること。

- $Z^{\text{inv}} := \{b \in \Omega : Z_b \downarrow \text{ は } D\text{-invariant}\}$

3.2 PROP. Z^{bdle} 、 Z^{inv} はともに局所座標の変換で不変

3.3 THM. [key theorem] $Z^{\text{bdle}} \subset Z^{\text{inv}}$

証明法

森本徹氏に Z を解空間とする微分方程式系 (Walker の定理の系によって具体的な形もわかる) の **prolongation** を用いればよいことを教示いただいた。

$Z_b \subset \mathcal{O}_{n,b}$: 有限次元部分ベクトル空間

$S_{Z,b} : Z_b \downarrow \times Z_b \longrightarrow \mathbb{C} : S_{n,b}$ から導かれた 1.5 線形型式

$\iota : Z_b \downarrow \longrightarrow \mathcal{O}_{n,b} \downarrow = \mathbb{C}[\tau]$: 包含写像

$\kappa : Z_b \longrightarrow \mathcal{O}_{n,b}$: 包含写像

随伴写像: $T_{Z,b} := {}^s \iota : \mathcal{O}_{n,b} \longrightarrow Z_b$ of ι ,

${}^s \kappa : \mathcal{O}_{n,b} \downarrow = \mathbb{C}[\tau] \longrightarrow Z_b \downarrow$ of κ .

(ι, κ が弱連続故、これらも弱連続)

$$\begin{array}{ccc}
 Z_b & \xrightarrow{\kappa} & \mathcal{O}_{n,b} = \mathbb{C}\{t - b\} \\
 \left. S_{Z,b} \right| & \xleftarrow{T_{Z,b}} & \left. S_{n,b} \right| \\
 Z_b \downarrow & \xrightarrow{\iota} & \mathcal{O}_{n,b} \downarrow = \mathbb{C}[\tau] \\
 & \xleftarrow{{}^s \kappa} &
 \end{array}$$

3.4 PROP. $Z_b \subset \mathcal{O}_{n,b}$: 有限次元部分ベクトル空間

- (1) $T_{Z,b} : \mathcal{O}_{n,b} \longrightarrow Z_b$ は弱連続
- (2) 等式 $\text{Ker } T_{Z,b} = (Z_b \downarrow)^{\perp_n}$, $(\text{Ker } T_{Z,b})^{\perp_n} = Z_b \downarrow$ が成立する。
ここで \perp_n は $S_{n,b}$ に関して直交する空間 (space of annihilators)
- (3) $T_{Z,b}$ はレトラクト、つまり $T_{Z,b} \circ \kappa : Z_b \longrightarrow Z_b$ は恒等写像
- (4) 随伴写像 ${}^s\kappa$ はレトラクト、つまり ${}^s\kappa \circ \iota : Z_b \downarrow \longrightarrow Z_b \downarrow$ は恒等写像

3.5 PROP. [Marinari et al., de Boor et al.]

$Z_b \subset \mathcal{O}_{n,b}$: を有限次元部分ベクトル空間とすると

$Z_b \downarrow \subset \mathbb{C}[\tau]$: D -invariant $\iff \text{Ker } T_{Z,b}$: 斉次イデアル

この性質を持ったレトラクトは補間法で重要

(Birkhoff: ideal interpolation scheme, “multiplicative”)

4. 束点に付随したアルチン環

$Z_b \subset \mathcal{O}_n(\Omega)$: 有限次元部分ベクトル空間

Prop. 4.4によって $b \in Z^{\text{inv}}$ では、 $Z_b \subset \mathcal{O}_{n,b}$ は $\mathcal{O}_{n,b}$ の剰余環として次数環の構造を持つ。この環 $A_{Z,b} := \mathcal{O}_{n,b}/Z_b \downarrow^\perp$ は有限次元ベクトル空間だから局所次数 Artin 環である。

特に $b \in Z^{\text{bdl}}$ とすると:

$f_1, \dots, f_p \in Z$ が存在して、 b の近傍 U 上の各点 t で $f_{i,t} \downarrow$ が $Z_t \downarrow$ の基底をなす。

よってイデアル $Z_t \downarrow^\perp$ は $S_{n,t} \langle f_{i,t} \downarrow \mid g \rangle = 0$ ($i = 1, \dots, p$) の解空間となる。

(t の函数としての $f_{i,t} \downarrow$) $\in \mathcal{O}_n(U)$ であるから、

g の十分高次の項は自由で、残りの有限個の低次斉次項はランクが定数の $\mathcal{O}_n(U)$ の元を係数とする同次線形関係で縛られている。

よってさらに U を絞れば $\{A_{Z,t} = \mathcal{O}_{n,t}/Z_t \downarrow^\perp : t \in U\}$ は、自由加群 $(\mathcal{O}_n|U)^p$ (ゆえに平坦) と同型となる。 ($p = \dim_{\mathbb{C}} Z$)

次数 Artin 環の低次からの次元を並べ、零が続くところで打ち切ったものを「型」と言うことにする。これは双対性により $Z_t \downarrow$ の次数による「型」と対応している。まとめて、

4.1 THM. 任意の有限次元ベクトル空間 $Z \subset \mathcal{O}_n(\Omega)$

($\Omega \subset \mathbb{C}^n$: 連結) に対して、 $\{A_{Z,t} : t \in Z^{\text{bdle}}\}$ は、解析的開集合 Z^{bdl} 上で、型が一定の局所次数 Artin 環の変形を与える。

これで有限次元ベクトル空間 $Z \subset \mathcal{O}_n(\Omega)$ ($\Omega \subset \mathbb{C}^n$) の分類可能。

4.2 THM. (ランク定理) $A_{Z,b}$ の型が $(1, p, a_2, a_3, \dots)$ であれば、局所座標を取り替えることにより、 $Z \subset \mathcal{O}_p \subset \mathcal{O}_n$ となり、 $a_i \leq \binom{p}{i}$ ($i \geq 2$) となる。 Z の零化 PDE 系 (1.3 THM.) は次の方程式を含む。

$$\frac{\partial^{|\nu|} F}{\partial t^\nu} = 0 \quad (\nu = (0, \dots, 0, k_{p+1}, \dots, k_n) \in \mathcal{Y}_m, \neq 0)$$

5. 埋め込まれた多様体の Bos-Calvi の高階接空間 以下「高階」は略す

$V_a \subset \mathbb{C}^m$: 埋め込まれた複素多様体

$\Phi = (\Phi_1, \dots, \Phi_m) : U_b(\subset \mathbb{C}^n) \longrightarrow V_a \subset \mathbb{C}^m$:

局所パラメトリゼーション (チャートの逆) の芽

$\varphi : \mathcal{O}_n \longrightarrow \mathcal{O}_m : f \longmapsto f \circ \Phi$

$P^d(V_a) \subset \mathcal{O}_{V,a}$: V_a 上の d 次以下の多項式函数のなすベクトル空間

$\mathbb{C}[\Phi]^d := \{\varphi(f) := f \circ \Phi : f \in \mathbb{C}[x], \deg f \leq d\} \subset \mathbb{C}\{t\}$:

$P^d(V_a)$ の引き戻し

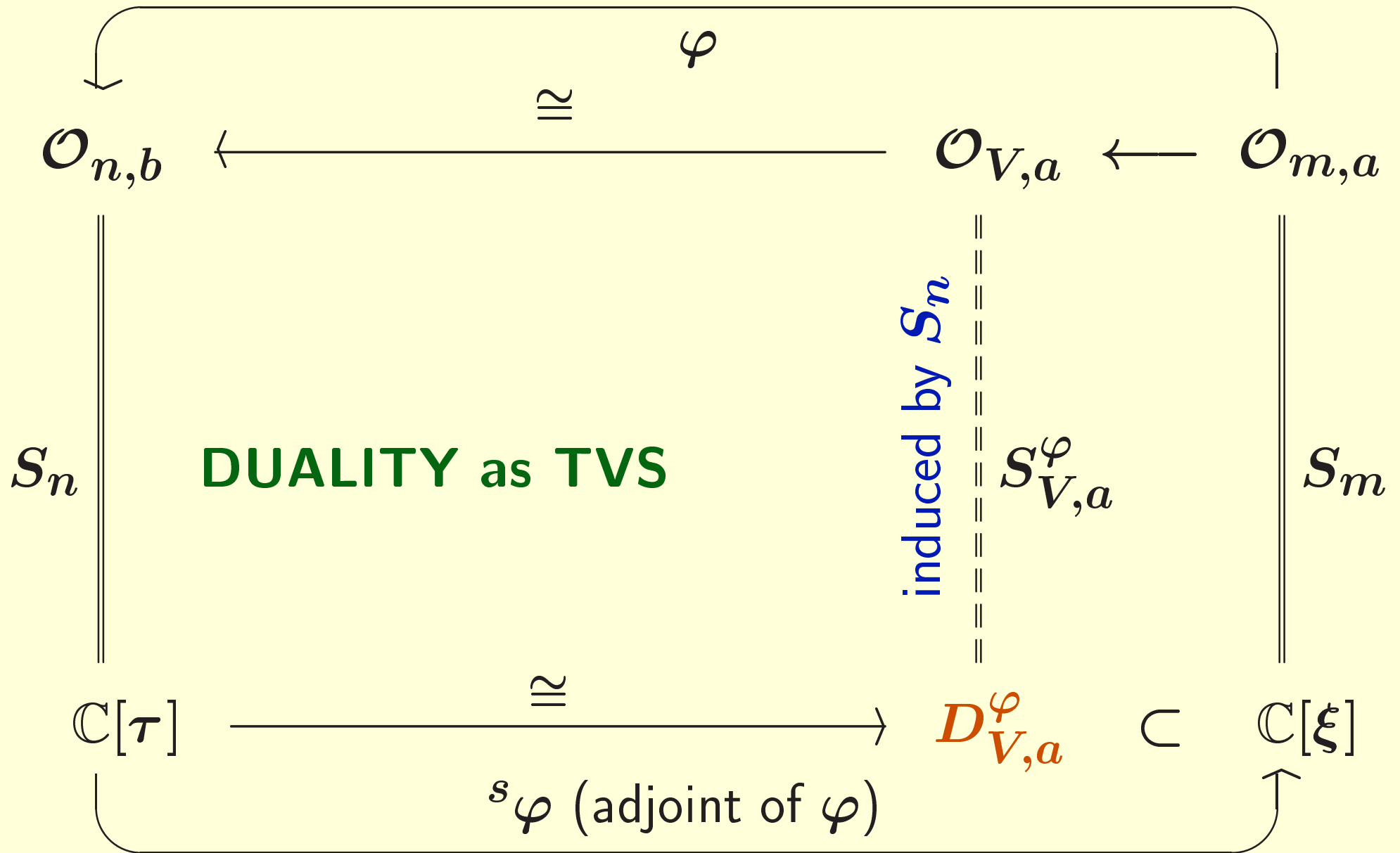
前節のベクトル空間 Z も、定数函数を含めば、

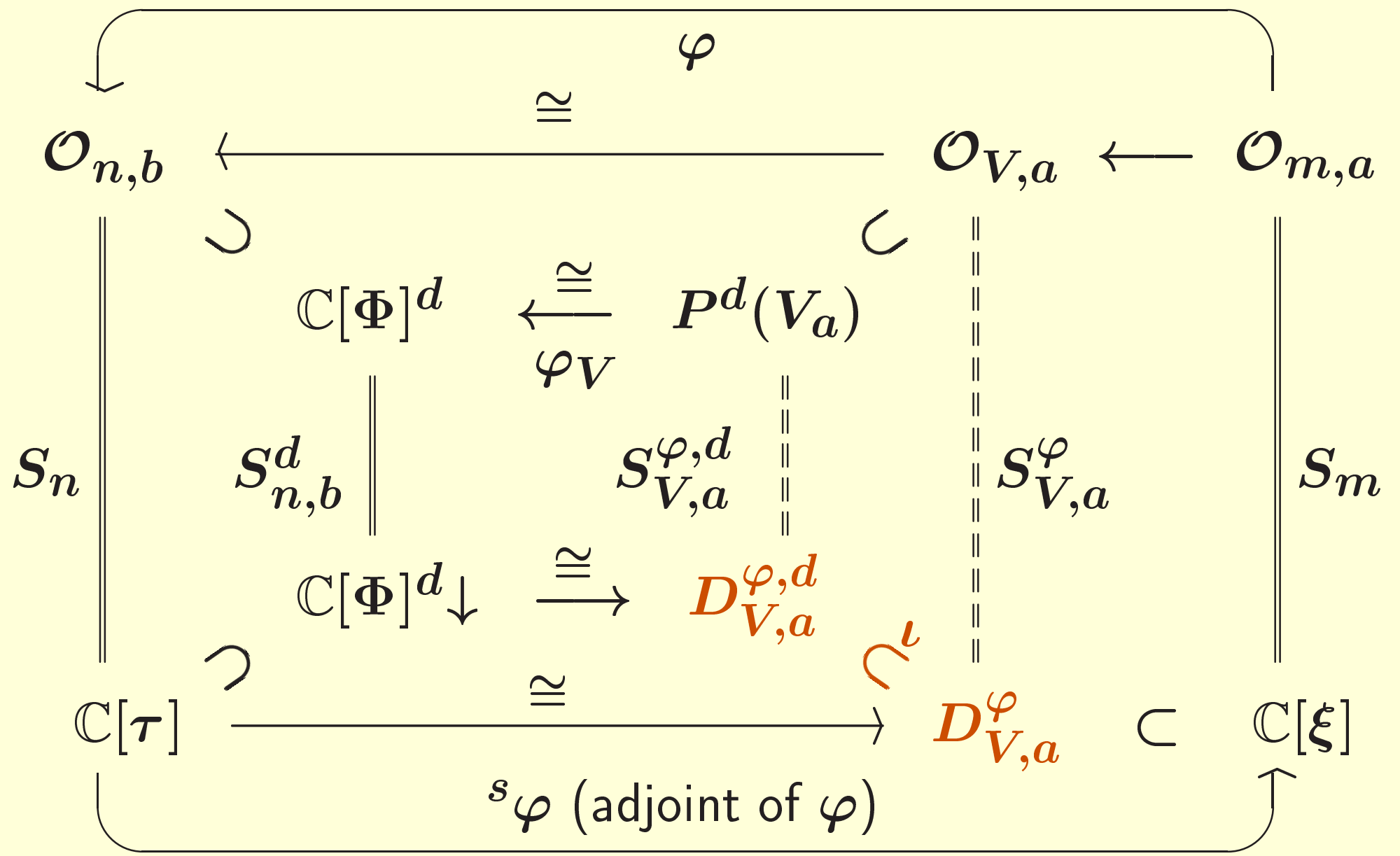
$Z = \text{Span}(1, \Phi_1, \dots, \Phi_m)$ と表し、 $\mathbb{C}[\Phi]^1$ と見なせる。

$\mathbb{C}[\Phi]_b^d \downarrow \subset \mathbb{C}[\tau] : \mathbb{C}[\Phi]^d$ の初項空間 .

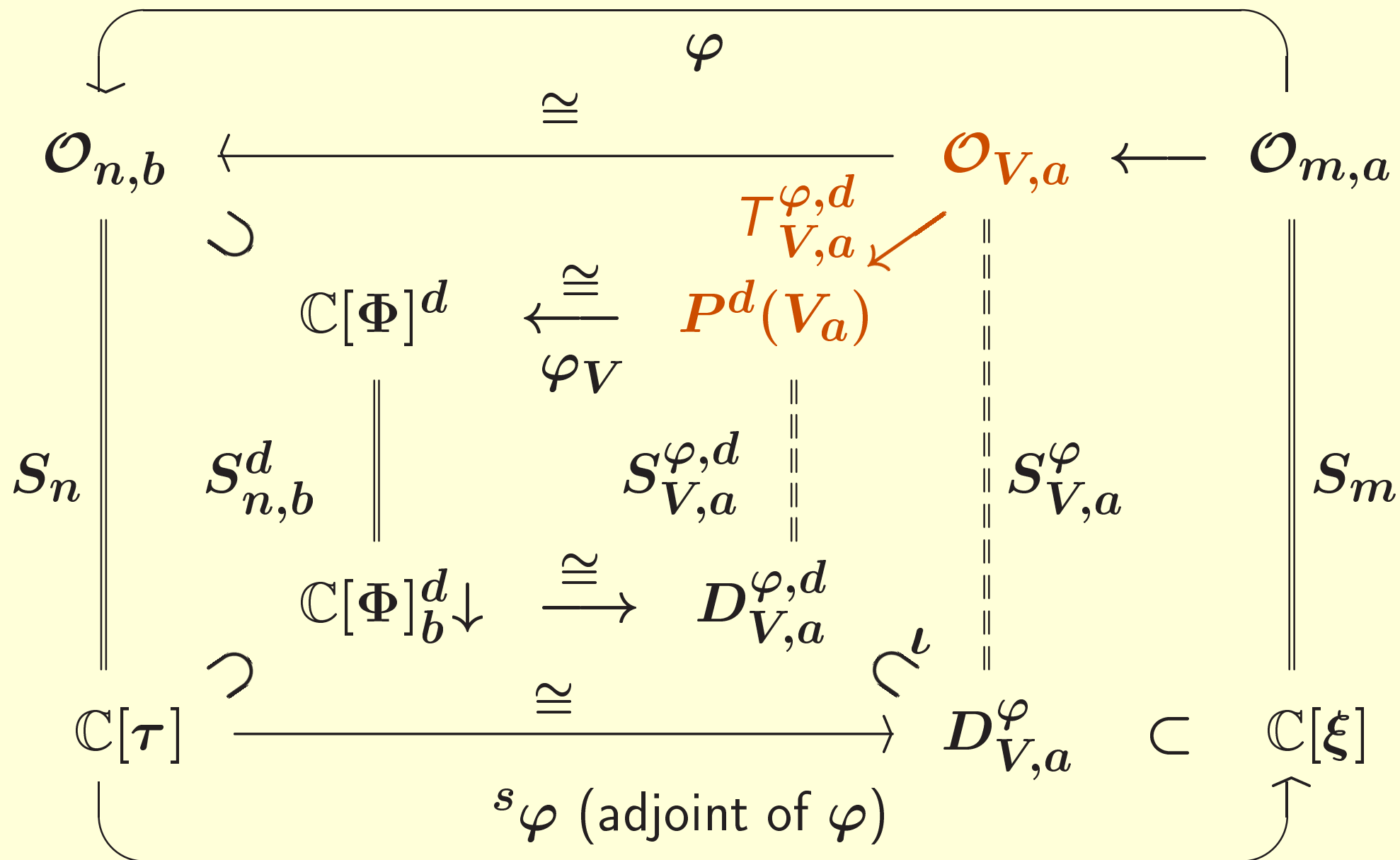
$S_{n,b}^{\varphi,d} : \mathbb{C}[\Phi]_b^d \downarrow \times \mathbb{C}[\Phi]^d \longrightarrow \mathbb{C} :$

$S_n : \mathbb{C}[\tau] \times \mathcal{O}_{n,a} \longrightarrow \mathbb{C}$ の制限である非退化 1.5 線形形式





set of Bos-Calvi tangents of dual deg d



TAYLOR PROJECTOR (next section)

6. 埋め込まれた多様体上でのテイラー展開

$V \subset \mathbb{C}^m$: 埋め込まれた複素多様体

$\Phi = (\Phi_1, \dots, \Phi_m)$ or φ : a local parametrisation of V at a .

$\iota : D_{V,a}^{\varphi,d} \longrightarrow D_{V,a}^{\varphi}$: inclusion

$T_{V,a}^{\varphi,d} : \mathcal{O}_{V,a} \longrightarrow P^d(V_a)$: ι の随伴

次数 d のテイラー展開と呼ぶ

6.1 LEM. $\mathbb{C}[\Phi]_b^d \downarrow : D$ -invariant in $\mathbb{C}[\tau]$

$\iff D_{V,a}^{\varphi,d} : D$ -invariant in $\mathbb{C}[\xi]$

$\iff T_{V,a}^{\varphi,d} : \text{環準同型 (multiplicative)}$

● $a \in V$: 次数 d の束点

$\stackrel{DEF}{\iff} J^k(\mathbb{C}[\Phi]^d)$ がベクトル束 ($\forall k \in \mathbb{N}$).

$\stackrel{Walker}{\iff} J^k(\mathbb{C}[\Phi]^d)$ がベクトル束 ($\forall k \leq \dim_{\mathbb{C}} \mathbb{C}[\Phi]^d - 1$).

6.2 THM. $a \in V$: 次数 d の束点 \implies 任意のパラメトリゼーション φ に対して $D_{V,a}^{\varphi,d}$ は a で D -invariant (THM. 3.3)

6.3 THM. あるパラメトリゼーション φ に対して $D_{V,a}^{\varphi,d}$ が a で D -invariant とすると、

Artin 環 $P_{V,a}^d = \mathcal{O}_{m,a} / (D_{V,a}^{\varphi,d})^{\perp m}$ は全て同型、つまり V_a と d で決定される。

この Artin 環を V の D -invariant point a における **次数 d のテイラー代数** という。

とくに $\dim V = 1$ すなわち曲線の場合は次のことが言える。

6.4 THM. $V \subset \mathbb{C}^m$: 複素多様体、 $\dim V = 1$ 、 $a \in V$ に対して

次の条件は同値

- $D_{V,a}^{\varphi,d}$: ある φ に対して D -invariant
- $D_{V,a}^{\varphi,d}$: すべての φ に対して D -invariant
- $T_{V,a}^{\varphi,d}$: φ に依存しない

結局 V の離散的な点を除いてテイラー展開が well-defined
(平面代数曲線の場合は [Bos-Calvi 2008.](#) が示した)

7. 解析集合芽の超越性: $\mathfrak{a} \subset \mathbb{C}\{X_1, \dots, X_m\}$: 素イデアル、

$A = \mathbb{C}\{X_1, \dots, X_m\}/\mathfrak{a}$: 剰余環 (整域)

$V_{\mathfrak{a}}$: \mathfrak{a} の元の共通零点として表される既約な解析集合芽 $\subset \mathbb{C}^m$

$x_i = X_i|_{V_{\mathfrak{a}}}$: 座標函数 (極大イデアル \mathfrak{m} の生成系)

(A, \mathfrak{m}) : $V_{\mathfrak{a}}$ の解析的局所環と言う。

$x := (x_1, \dots, x_m)$: \mathfrak{m} の生成系

DEF. $\theta_x(k) := \max\{\text{ord}_{\mathfrak{m}} p(x) : p \in \mathbb{C}[x], \deg p = k, p(x) \neq 0\}$
zero-estimate function

例: $A := \mathbb{C}\{X_1, X_2\}/(X_1^2 - X_2^3)$

$\theta_{(x_1, x_2)}(k) := \max\{\text{ord} p(x_1, x_2) : \deg p = k, p(x_1, x_2) \neq 0\} = \lfloor \frac{3}{2}k \rfloor$

例: $A := \mathbb{C}\{X_1, X_2\}/(X_2 - e^{X_1} + 1)$

$\theta_{(x_1, x_2)}(k) = \max\{\text{ord} p(x_1, x_2) : \deg p = k\} = (k + 1)^2$

(証明は常微分方程式の初歩による)

簡単のため $\theta_x(k)$ の k に関する次数だけに注目する。

DEF. $\alpha(A, x) := \limsup_{k \rightarrow \infty} \log_k \theta_x(k)$:

局所環 A の極大イデアルの生成系 x

あるいは特異点のアフィン埋込 $V_a \subset \mathbb{C}^m$

の超越指数 transcendency index

実際次のことが成立する。

7.1 THM. [Iz 1998] (解析集合の代数性の条件)

(A, Φ) or 特異点のアフィン埋込 $V \subset \mathbb{C}^m$ に対して次の条件は同値

(1) $\alpha(A, x) = 1$

(2) $\exists a, \exists b : \theta_x(k) \leq ak + b$ (Remember Bezout)

(3) $V \subset \mathbb{C}^m$ は代数的集合の解析的既約成分

例：レムニスケートの原点における1分枝

以下多様体のアフィン空間への埋込に話を限定する。

8. 一般の点における零評価

$V_a \subset \mathbb{C}^m$: 埋め込まれた多様体、 $A := \mathcal{O}_{V,a}$

$\Phi = (\Phi_1, \dots, \Phi_m) : (\mathbb{C}^n, b) \longrightarrow (\mathbb{C}^m, a)$: local parametrisation

超越指数 α は次式で定義された。

$$\begin{aligned} \theta_{A, \mathfrak{m}_a}(d) &= \theta_{\mathcal{O}_{n,b}, \{\Phi_1, \dots, \Phi_m\}}(d) \\ &:= \sup \{ \text{ord } f : f \in \mathbb{C}[\Phi]^d \setminus \{0\} \} \\ &= \max \{ \deg p : p \in D_{V,a}^{\varphi, d} \}. \end{aligned}$$

$$\alpha(\Phi) = \alpha(V_a)$$

$$:= \limsup_{d \rightarrow \infty} \log_d \theta_{\mathcal{O}_{V,a}, \{X_1|V, \dots, X_m|V\}}(d).$$

これ等は $V_a \subset \mathbb{C}^m$ だけで定まり、パラメトリゼーション Φ には依らない。

$\alpha(V_a) = \infty$ となることもある :

8.1 EXAMPLE 上田哲生 [Iz1]

$$f(x) := \sum_{i=1}^{\infty} \frac{1}{(2^{i!})!} x^{2^{i!}} : \quad \text{a gap series}$$

$$V := \{(x, y) : y = f(x)\}$$

$$\implies \alpha = \infty \text{ for } V_{(0,0)}.$$

これは Liouville のギャップ数列による超越数の構成の類似である。

$$\begin{aligned} \text{Hilb}_{\overline{V}_a}(d) &:= \dim_{\mathbb{C}} P^d(V_a) - \dim_{\mathbb{C}} P^{d-1}(V_a) \\ &= \dim_{\mathbb{C}} D_{V,a}^{\varphi,d} - \dim_{\mathbb{C}} D_{V,a}^{\varphi,d-1}: \\ &\quad \overline{V}_a \text{ のヒルベルト函数 } (d \text{ の函数}) \end{aligned}$$

(\overline{V}_a : V_a の小近傍における (代数的) なザリスキ閉包)

p.3 の Lemma 1.1 により

8.2 THM.

$\Phi : \mathbb{C}_0^n \longrightarrow \mathbb{C}_a^m$: V_a の局所パラメトリゼーション

$a \in V$: D -invariant

\implies

$$\binom{n+d}{n} + \theta_{\mathcal{O}_{n,0,\{x_1,\dots,x_m\}}}(d) - d \leq \sum_{i=0}^d \text{Hilb}_{\overline{V}_a}(i) \leq \binom{m+d}{m},$$

$$\alpha(\Phi) = \alpha(V_a) \leq \dim \overline{V}_a \leq m.$$

8.3 COR. $\alpha(V_a) > \dim \bar{V}_a$ となる点の全体は、 V でベールの第一類集合、ルベーク測度ゼロの集合をなす。

Noetherian 函数: アフライン空間の開集合の函数でアフライン座標を含む有限個の函数で生成され D -invariant な環 (Tougeron and Khovanskii) :—

$x := (x_1, \dots, x_n)$: アフライン座標系

$\Phi := \{\Phi_1, \dots, \Phi_m\}$ が位数 m のネター鎖であるとは:

$$\exists P_{ij} : \partial \Phi_i / \partial x_j = P_{ij}(x_1, \dots, x_n, \Phi_1, \dots, \Phi_m)$$

$$(i = 1, \dots, m; j = 1, \dots, n)$$

$\Psi := \{x, \Phi\} \subset \mathcal{O}_{n,b}$ の多項式をネタリアン函数という。

Gabrielov [Ga] : ネタリアンなベクトル場の積分曲線上でネタリアンな関数の零評価を与えた。 (see [GK] also). この結果から評価

8.4 COR. $\alpha(\Psi) \leq 2(m + n)$

が出る。 (cf. [Iz₄], Corollary 12).

我々の 8.2 THM. は、ネタリアンの仮定なしに、よりシャープな評価

$$\alpha(\Psi) \leq \dim \bar{V}_a \leq m + n$$

を導くが、これは V の一般的な点でしか成立しない。
上田の例 8.1 によれば、この種の評価がすべての点で成立することとはあり得ないのである。

TRANSCENDENCE INDEX

	category of V	place	tr. index $\alpha(\Psi)$
Gabrielov	graph of Noetherian mapping	all points	$\leq 2(m + n)$
COR. 4.2	complex manifold	generic point	$\leq \dim \bar{V}_a \leq m + n$

REFERENCES

- [Bi] G. Birkhoff, The algebra of multivariate interpolation, in: Constructive approaches to mathematical models (ed. C. V. Coffman et al.), Academic Press (New York), 345-363 (1979)
- [Bo₁] N. Bourbaki, Éléments de mathématique: Algèbre Chapt. 9, Hermann, Paris (1959)
- [Bo₂] N. Bourbaki, Éléments de mathématique: Espaces vectoriels topologiques Chapt. 1,2,3,4, Hermann, Paris (1966)
- [BC₁] L. Bos, J.-P. Calvi: Multipoint Taylor interpolation, *Calcolo* **45**, 35-51 (2008)
- [BC₂] L. Bos, J.-P. Calvi: Taylorian points of an algebraic curve and bivariate Hermitian interpolation. *Ann. Scuola Nor. Sup. Pisa Cl. Sci. (5)*, **VII**, 545-577 (2008)

- [BR₁] C. de Boor, A. Ron: On multivariate polynomial interpolation, *Constructive Approximation* **6**, 287-302 (1990)
- [BR₂] C. de Boor, A. Ron: The least solution for polynomial interpolation problem, *Math. Z.* **210**, 347-378 (1992)
- [Ga] M. Gabrielov: Multiplicity of a zero of an analytic function on a trajectory of a vector field, in: *The Arnoldfest* (ed E. Bierstone et al.), *Fields Inst. Communications* v.24, AMS, 1997, 191-200
- [GK] M. Gabrielov, A. Khovanskii: Multiplicity of a Noetherian intersection, *Amer. Math. Soc. Transl. (2)*, **186** (1998)
- [GR] H. Grauert, R. Remmert: *Analytische Stellenalgebren*, *GMWE* **176**, Springer, Berlin (1971)
- [Iz₁] S. Izumi: A criterion for algebraicity of analytic set germs, *Proc. Japan Acad.* **68** Ser.A 307-309 (1992)

- [Iz₂] S. Izumi: Transcendence measures for subsets of local algebras, in: Real analytic and algebraic singularities (ed. T. Fukuda et al.) Pitman Res. Notes Math. **381**, Longman, Edinburgh Gate 1998, 189-206
- [Iz₃] S. Izumi: Introduction to algebraic theory of multivariate interpolation: in Real and complex singularities, Proceedings of Australian-Japanese Workshop (ed. L. Paunescu et al.), World Scientific 2007, 85-108
- [Iz₄] S. Izumi: Local zero estimate, in: Several topics in singularity theory, Sūrikaisekikenkyūsho Kōkyūroku **1328**, 159–164 (2003)
- [Wa] R. A. Walker: Linear dependence of quotients of analytic functions of several variables with the least sub-collection of generalized Wronskians, Linear Algebra Appl. **408**, 151–160 (2005)

19 April, 2012,

revised: 9 March, 2013 (the birthday of S. I.)